

兵庫が育む ころろ豊かで自立した人づくり

兵庫教育

5 月号
2017 No.795

特集

安心して学べる学級づくり

— 一人一人の良さをいかした計画的な学級経営 —



海遠足で磯観察

～香美町立柴山小学校～



月刊「兵庫教育」

URL:<http://www.hyogo-c.ed.jp/kenshusho/>

発行：兵庫県教育委員会
編集：兵庫県立教育研修所

特集

安心して学べる学級づくり
— 一人一人の良さをいかした計画的な学級経営 —

学校訪問

ひとみ輝かせ、躍動する柴山っ子

香美町立柴山小学校

巻頭言

知との遭遇

兵庫県立教育研修所長 横山 一郎 1

論文

学級の集団づくりと人間関係づくりを支える授業の構造

兵庫教育大学大学院学校教育研究科 教授 山 中 一英 4

教育実践

幼児一人一人の思いに寄り添ったクラスづくり
～子供たちの気付き、発見を大切に～

加古川市立別府町幼稚園 教諭 坂上加奈恵 8

子供たち一人一人が安心して学べる学級づくり
～担任が『学習指導』へ向かう環境を整えるための“時間”を意識した取組～

神戸市立本庄小学校 教諭 松尾 哲郎 11

安心して学べる学級作り
～一人一人の良さをいかした計画的な学級経営～

上郡町立上郡中学校 主幹教諭 森中 誠 14

生徒一人一人の良さをいかした学級経営
～工業高校で共通教科教員の私が担任をするということ～

県立兵庫工業高等学校 教諭 大江 春香 17

「自分が好き！みんなが好き！」
～聞こえない自分に自信を持って生きる～

県立姫路聴覚特別支援学校 主幹教諭 小西 智晶 20

授業実践研修レポート

中学校 数学科 空間図形「クラッカーの展開図をかこう」
～「錐体の展開図の学習で身に付けさせたい力」について考える～

県立教育研修所 義務教育研修課

授業者：小野市立旭丘中学校 教諭 洲之内 仁 27

グローバル化する社会への対応（第29回）

西オーストラリア州との教員交流プロジェクトでの経験

県立長田高等学校 教諭 清澤 芳寛 31



ひょうごの若者を支える力

心の冒険で新たな自分と出会う
～ひょうご冒険教育（HAP）の取組～

公益財団法人兵庫県生きがい創造協会 嬉野台生涯教育センター 所長

ふじもり やすひろ
藤森 泰宏 34

ひょうごの歴史探訪④ -古代篇-

志深ミヤケと湯山街道

兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター

さかえ わたる
坂江 渉 36

連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導（第49回）
～学習指導要領改訂に向けた取組ポイント～

県教育委員会事務局 特別支援教育課 38

管理職による随想

私のユニバーサルデザイン

前篠山市立篠山東中学校長

もり た やすひろ
森田 恭弘 39

コラム「学校の窓」

チョウの話

神戸大学大学院 教授

わたなべ たかのぶ
渡邊 隆信 40

編集後記

トピックス P23～26

〔但馬〕養父市立大屋こども園

わくわく大屋っ子タイム 25

〔播磨東〕多可町立中町中学校

中町中学校リーダー研修会 24

〔播磨西〕赤穂市立赤穂東中学校

「あったかい心」届け 25

〔県立〕県立小野工業高等学校 定時制課程

ムーンライト・メッセージ 23

〔丹波〕丹波市立和田小学校

新たな学びの形態研究から 26

〔神戸〕神戸市立葺合中学校

KOBEアスリート食育講座 23

〔阪神〕宝塚市立小浜幼稚園

歴史ある宿場町で育つ子どもたち 24

〔淡路〕南あわじ市立松帆小学校

第26回「地域を知ろう」 26

特 幼稚園
集
No.1

幼児一人一人の思いに
寄り添ったクラスづくり
～子供たちの気付き、発見を大切に～



加古川市立別府町幼稚園
教諭 坂上 かな恵

1 はじめに

本園は、別府港のすぐ北に位置し、園の周りには、商業施設や工場が多く立ち比較的自然而少ない地域である。

本園の幼児は、人懐っこく初めて出会った人にも、自分から話しかける等、人と関わるのが好きである。しかし、

- ・教師の指示がないと行動できない。
- ・自分の考えで遊ぼうとしない。
- ・初めてのことやできないことは、自分からしようとしなない。
- ・友達の遊びに自分から入っていけない。
- ・周りを気にせず、自分の思いのみで遊んでいる。

等の幼児の実態があった。

そこで、幼児が自ら考え、“こうしたい”という思いや目当てをもって遊ぶようになってほしいと願い、

- (1) 幼児の内面の動きを読み取り、思いに寄り添いながら必要な援助をすること。
- (2) 今、どのような支えが必要か、何を欲しているのかを考え、時期を逃さず的確に援助すること。
- (3) 幼児が自ら環境に働きかけたり、思いを実現したりできる環境を意図的につくり出すこと。

が、必要であると考え、幼児が一人一人の良さを活かし、自ら心を動かして遊ぶためには、どのような援助が適切であるのかを探っていた。

2 事例『ビワをとりたい!!』

本園では、2年間の主体性の育ちを見通す中で、4歳では一人一人が安心して自己発揮できるような援助を心がけてきた。

ここで紹介する事例は、5歳児の主体的に生活する姿に刺激を受け、憧れをもちながら一年間を過ごしてきた幼児たちが進級し、4歳の経験を活かしながら活動に取り組んだエピソードである。

昨年度、幼稚園の裏庭にあるビワを5歳児がとり、4歳児に届けてくれた。「幼稚園にこんなおいしいものができていたんだ!」「初めて食べたよ」「ビワっていうんだ」と驚き、とってくれた5歳児に「すごいなあ」と憧れや感謝の気持ちをもった。そのような経験をした子供たちは、5歳児に進級した当初から、ビワの木を気にかけ成長を楽しみにしていた。

『みんなの思いがひとつに』

5月のある日、A児とB児がおいしそうに色付いてきたビワの実を発見したことから、教師は早速二人の気付きを全体に伝える場をもった。

そこで、4歳児での経験を思い出した子供たちは『自分たちでビワをとって食べたい!そして年少さんにも分けてあげたい』と思いが一つになり、目的を共有することができた。心を動かし、興味や関心を広げながら身近な環境に進んで関わろうとする姿が見られたのである。

『みんなで作戦会議！！』

「ビワをとりたい！」という気持ちが高まった子供たちは、すぐにビワをとる作戦を考え始めた。「どうやってとる？」と教師が問いかけると「手でとる」「ジャンプしてとる」「木に登ってとる」等、色々な方法が出てきた。「でも、木は高く届かないのではないか」という友達の発言で、予想以上に木が高いことを実感した子供たち。「僕たちじゃ届かない」と、より具体的に方法を考え始め、「カラーボックスに乗ったらいんじゃない？」「でも一つじゃ足りないよ」「二つを重ねたらどうかな」「脚立はどう？」「前の年長さんもビワをとるのに使ってたよ」「それも使ってみよう！」と、子供たちの提案で作戦会議が進んでいったのである。



▲ 二つ重ねたら届くかな？

この話し合いでは、教師が一人一人の提案にじっくり耳を傾け、共感したり認めたりしたことで、思いや考えを自分なりに表現しようとする姿が見られた。

『ビワとり作戦，実行！！』

翌朝，前日の話し合いで出てきた用具を自分たちで準備し，ビワとり作戦実行！

子供たちが考えた方法を実際に試すことができるよう，教師はそばで見守ったり一緒になって取り組んだりした。

しかし，木の上の辺りについてはいる実は，どの方法を使っても届かず，困った子供たちは，早速2回目の作戦会議を始めた。



▲ う～ん，届かない…

「2階の窓からなら届くんじゃない？」と確認に行き「窓から先生がその長いはさみで切ってビワを落として！僕たちは，下で待ってて受け取るよ」「でも先生が落ちたら大変！先生を押さえるチームと手や虫取り網で受け取る下のチームに分かれよう！」と，新しい方法やチームに分かれてやってみることを考えた。

子供たちは，自分たちが考えた方法を絵に表すことで，イメージを共有して取り組むことができた。



▲ 2階の窓からはさみで切る作戦

そして、自分たちでみつけた課題に向かい夢中になって考えたり、あきらめずに自分たちの力で何とかやり遂げようとしたりする姿が見られたのである。



▲ 作戦実行！うまくいくかな？

作戦が成功し、ビワをとり終えた子供たちは、まず自分たちでとったビワを一つずつ食べ、「年少組の時と違う味がする！」「自分でとったビワは最高においしい！」と一粒のビワを一口一口大切に口に運んでいた。

『みんなに分けよう！』

そして、次に、二つ目の目的である「みんなに分けてあげたい！」という思いを実現しようと、子供たちはとったビワを数え始めた。クラスの人数や先生たちの人数を調べ、必要な数を書き出していくと、子供たち自らクラスごとのかごを準備し、誰がどのクラスにビワを届けに行くのかを話し合い始めた。



▲ 何個とれたかな？

そして、年少組さん、他のクラスの先生や警備員さんにビワを届けた。「美味しいよ。年長組さんありがとう」と喜んで食べてくれる様子を笑顔で見ている子供たちの姿から、達成感や満足感を味わっていることを感じた。

3 成果

このように、教師は幼児の興味や関心に基づき「こうしたい！」「やってみたい！」という思いをできる限り幼児の力で実現できるように心がけ、その中で幼児の気付きや発見を大切に受け止めることを常に意識して援助していくようにした。

また、身近にある環境を活かしながら、思わず遊び出したくなるようなきっかけを意図的につくったり、幼児間で思いや目的が共有できるよう橋渡ししたりすることで、幼児は夢中になって遊ぶようになってきたと考える。

さらに、じっくり活動できる時間を確保したことで、幼児は試行錯誤を繰り返しながらも、目的を達成しようと、粘り強く取り組むことができるようになり、困難を乗り越え、思いが実現できた満足感ややり遂げた達成感を味わうことができたと考える。

また、私たちは、幼児一人一人の発見や気付き、思いを丁寧に受け止め、クラスに広げていける場をもつことを常に大切にしてきた。その繰り返しのによって、クラスの話合いの場で、“先生や友達に聞いてもらえる”“認めてもらえる”という安心感が生まれ、幼児の「伝えたい」という意欲が育っていった。

教師が、幼児一人一人の小さな思いに気付き、大切に関わっていったことが、友達同士で伝え合ったり、認め合ったりできる姿につながったのではないかと考える。

特 小学校 No.2 集

子供たち一人一人が
安心して学べる学級づくり
～担任が『学習指導』へ向かう環境
を整えるための“時間”を意識
した取組～



神戸市立本庄小学校
教諭 まつお てつろう
松尾 哲郎

子供たち一人一人が安心して学べる学級づくりを行うために、『学習指導』が最も重要なポイントのうちの一つであることは、ある程度の経験を積んだ教員ならば誰しもが実感することである。高いレベルで行われる『学習指導』は、子供たちの学習意欲を高め、主体的な学びへとつなげる。それだけでなく、基本的な学習規律の定着は、生徒指導面において最大の未然防止策といえる。

しかしながら、全ての業務に一人の教員で対応するには時間が足りない。配慮を要する児童の増加、膨大な事務処理、保護者との連絡・連携、課外活動など、その要因を挙げればきりが無い。

私は平成27、28年度と生徒指導担当として、本庄小学校に勤めた。本稿では、“時間”をキーワードとして進めた私の生徒指導の取組を紹介する。

1 生徒指導担当としての決心

神戸市では、学校の実態に応じて、専任の生徒指導担当が配置されている。生徒指導については、個々の学級担任の取組だけに任せるのではなく、学級や学年の垣根を越えて、さらに家庭や地域と連携しながら、学校全体での組織的な取組を推進していく必要がある。

平成27年度に生徒指導担当となった当初に

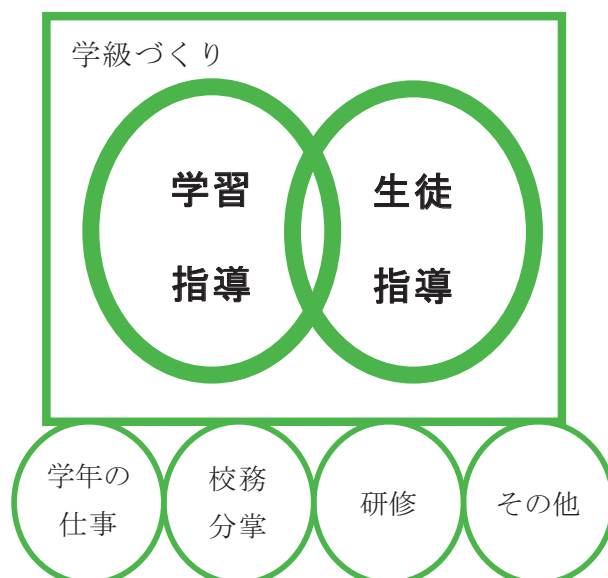
は、具体的に何をすればよいのか分からずにいた。一方子供たちは例年に比べ落ち着いたスタートをきることができており、配慮を要する児童はどの学年にもいるものの、学年や学級がしっかり対応できている状況であった。

私は、適切な“時間”に適切な動きができるという専任の生徒指導担当という強みを効果的に活かし、児童や担任の先生方を支えることによって、学級、学年、学校を支えていくことを決意した。

2 時間を見極める

①教員の時間

<図1>



まずは教員一人の時間を見極める。

図1は学級づくりを円滑に進めるために、担任が担う仕事である。『学習指導』と『生徒指導』が両輪となって学級づくりの中心となり、『学年の仕事』や『校務分掌』、『研修』等がそれを支えている。

仮に、全ての円の総面積が一人の教員が教育活動において実際に費やす総時間数だとすると、現在の学校現場では図1のようにはいかない。冒頭に述べたように、『生徒指導』や『学年の仕事』、『校務分掌』、『その他の仕事』にかかる時間が多く、その分『学習指導』にかける時間が少なくなっているのが現状である。

②学年の時間

次に学年の時間を見極める。

ある学年の構成例

51 歳 + 38 歳 + 31 歳
(男) (女) (男)

このように、一見バランスよく見える学年構成でも、各教員には様々な事情が考えられる。育児・介護を含め、日常業務からは判断が付きにくい悩みを抱えている場合もある。全ての教員が持ち味を生かすためには、互いに支え合う体制づくりが必要となる。

円滑な学年運営のための時間が十分に確保できないと想定される学年集団には、学年を越えた適切なサポート体制の構築が検討される必要がある。生徒指導担当として、子供たちの健やかな成長のためにも、教員を支えていく必要性を強く感じている。

3 時間を整える。

①問題行動への対応

生徒指導において未然防止が最大の方策とはいえ、問題行動を完全に防ぐことは難しい。子供たちの心を理解するためには、担任が子供と向き合ってじっくりと話をする必要がある。子供との対話やそれを通しての指導が子供からの信頼の獲得につながり、その積み重ねが学級づくりの基盤となる。

そこで私は担任が時間を確保できるようサポートすることを意識した。担任が当該児童と対話する時間がすぐにでも必要な場合は、代わりに私がクラスをサポートした。担任がクラスに戻らなければならない場合は、担任の代わりに当該児童と話し合いの場をもった。そして、生徒指導担当として「休み時間には運動場の遊具での危険な行為への注意」など、子供たちに注意を与えなければいけない場面では積極的に指導し、担任が笑顔で子供たちと触れ合い、心を通い合わせる時間を作り出すことを最優先に考えた。

②不登校

不登校児童へのかかわりで必要な活動には、目に見えるものとそうでないものがある。前者は『家庭訪問』であり後者はいわゆる『居場所づくり・絆づくり』である。

『居場所づくり・絆づくり』は不登校解消へ向けて必要不可欠かつ最良の手立てであると考えられる。担任と児童の絆、児童とその友達の絆など絆であふれた学級をつくることが居場所づくりとなるだろう。しかし、教室で子供たちを笑顔で迎え入れる担任としては、気になりながらも自由に動きまわる朝の時間がないのが現実である。

そこで、朝の家庭訪問については私が積極的に行った。保護者との連携にも積極的にか

かわり、担任との橋渡しを行った。担任には放課後に、落ち着いた雰囲気の中で、寄り添い、子供との絆を深めるための時間を大切にするようにしてもらった。

③授業

適切なサポートが必要と判断したケースでは授業の補助にも積極的に参加することにした。私は生徒指導担当という立場から、すべての学年の生徒指導に入っているの、各学年の様子はよく理解できていた。教材づくりや授業の進め方を担任とともに考え、授業の支援をすることで、担任の自由になる時間を少しでも確保し、余裕をもって子供たちと向き合える時間を作りだしたいと考えた。

④関係機関との連携

学校だけでは対応が困難な問題に対応するために、関係機関・専門家との連携は欠かせない。適切な連携は、問題の早期解決につながり、対応にかかる“時間”を減らすことにもつながる。

そのために、こちらから声を掛け、担任とは頻繁にハウ・レン・ソウを行った。特に若手の教員には丁寧に話を聞いた。場合によっては、スクールカウンセラーにも協力いただき、専門的な立場から適切なアドバイスをいただくことで早急に問題の解決につながったケースもあった。私がコーディネーターとして関係機関との連絡調整をすることが、担任の“時間”の確保にもなっていた。

⑤環境整備

毎朝のトイレの見回り、ゲストティーチャーへの対応、ゴミの管理、名簿作成、教室配置計画、プリント印刷・配布など、現在の学校現場には膨大な業務があり、数えればきりが無い。その多くを小学校では担任が

担っている。

そこで、担任が少しでも学級や学年の子供たちと向かい合う時間を確保できるように、上述のような業務を可能な限り引き受けた。そういった活動は“時間”を生み出すことにつながり、結果的に生徒指導面でも未然防止につながったように思う。

4 おわりに

子供たちの可能性は無限であり、子供たちの力を伸ばすためならいくらでも時間を惜しまないのが教員の本分なのかもしれない。私自身もそこで得られる喜びこそが教職の醍醐味であると強く思う。

だからこそ多忙化が叫ばれる現在の教育現場において、“時間”については慎重に検討されるべき課題の一つではないだろうか。担任が子供と向き合う時間を確保することが最も大切にされるべきである。限られた時間の中で子供たちの可能性を最大限に引き出すためには、その時間の適切な調整が必要である。

神戸市においても、この現状を改善する取組の一環として教頭を補佐する総務・学習担当や来客・電話対応のための補助スタッフのポストが設置される。その施策によって生み出された時間が少しでも担任の『学習指導』に充てられ、子供たち一人一人が安心して学ぶことができる学級づくりが成されることを願っている。



特 中学校 集 No.3

安心して学べる学級作り
～一人一人の良さをいかした
計画的な学級経営～



上郡町立上郡中学校
主幹教諭 森中 誠

1 はじめに

本校は、兵庫県の最西端に位置し、上郡町内の全小学校の児童が集まる町内唯一の中学校である。生徒数が年々減少傾向にあり、現在計15クラス(通常学級12、特別支援学級3)の学校である。



▲ 8年前に新築された校舎

小さい町であるがゆえに、幼・小・中・高の連携を深め、上郡町の子どもを育てようという意識は高い。上郡町教育研修所内に小中連携の教科・教科外の部会があり、情報交換や指導方法の研究、指導力の向上に向けて取り組んでいる。また、中・高の連携では、県立上郡高校と相互の授業参観や教科部会を年1回開いて、生徒の学習状況の情報交換や学習課題について協議している。

本校も、いろいろな教育課題があるが、まずは基盤となる「安心して学べる学級作り」に取り組んでいる。これまでの経験値の高いベテラン教員の指導だけでは、どんどん増える若手教員の指導との差が生まれていく課題があった。個々の職員が持つ生徒の情報を、

多くの職員が共有していく必要性があった。また、対人関係能力が弱まりつつある生徒に対して、いかにその力をつけ、学級内の人間関係を良好に作り上げていくかも課題であった。そこで、本校では以下のような取組をはじめた。

2 取組

(1) 安心して学べる集団作り

一人一人が自分の長所を生かして、役割を持ち、学級や学年の中で活躍していくためには、まずは規律ある健全な集団作りが必要である。基本的なことであるが、以下のことに重点的に取り組んだ。

- ・朝の挨拶運動
- ・駐輪場の整列
- ・下駄箱の整頓
- ・ノーチャイム
- ・清掃活動の徹底



(2) 人間関係の見える化

生徒の学級の中での状態や心理状態を把握するのに「Q-U」診断テストを行っている。

「Q-U」(Questionnaire-Utilities)とは、『楽しい学校生活を送るためのアンケート』のことであり、簡単な質問で生徒の学級での状態をグラフ化する心理テストである。

関係機関に依頼して、細かな分析をする。
この場合は、以下の3種類のアンケートがある。

- ①やる気のあるクラスを作るためのアンケート【学校生活意欲尺度】
- ②いごこちのよいクラスにするためのアンケート【学級満足尺度】
- ③日常の行動を振り返るアンケート【ソーシャルスキル尺度】

これらのアンケートから、それぞれの尺度で個々の意識をグラフ化し、客観的な生徒理解の材料としてきた。

また、生徒の状態は、承認得点（友達や教師から認められているか）と被侵害得点（不適応感、いじめ、冷やかしなどを受けているか）から、それぞれを基準とする座標軸で表される。



▲ 個人分析シートと学級満足度グラフ

グラフから、意外な結果に気づくことがある。学級代表で頑張っている生徒が、実は非承認群や不満足群に入っていることがある。原因としては、前向きに頑張っているが自分の思いとは違う学級の状態であったり、教師の言葉かけが少なかったり、学級全体で認められる場面が少なかったりしたことが考えられる。また、とてもおとなしく弱い立場だと思っていた生徒が、人間関係は良好で、学級にも大変満足していることもある。逆に生徒

指導上問題のある生徒が、高い学級満足群に位置している場合は、学級の状態が要注意である場合もある。これらのデータは、定期テスト前ごとに実施する教育相談での、教師の言葉かけの大切な材料になった。

また、担任が学級の生徒の様子を分析し、文章化することで、頭の中にあるイメージを客観的資料とした。これらの資料を職員会議で全職員が情報共有することで、担任以外の職員も生徒への関わり方を工夫することができた。

▲ 担任が生徒の状況や人間関係などを分析した資料

(3) 生徒のコミュニケーション能力の育成

本校が取り組んでいるSEL-8S (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at the School) とは、対人関係能力と自尊心の育成のための学習プログラムである。このプログラムでは以下の8つの社会的能力を育てることを目標にしている。

- ①自己への気づき
- ②他者への気づき
- ③自己のコントロール
- ④対人関係
- ⑤責任ある意思決定
- ⑥生活上の問題防止のスキル
- ⑦人生の重要事態に対処する能力

⑧積極的・貢献的な奉仕活動

この学習プログラムを計画的に取り入れ、生徒の社会性やコミュニケーション能力を養った。これらの力は、よりよい人間関係を構築する力となるだけでなく、生徒指導上の問題や学習に取り組む姿勢にも関わってくる。

心が大きく揺れ動く思春期の生徒に対して、自己や他者への思いやりなどの力、コミュニケーション能力の育成に役立った。

「冷静に伝える」①	
_____年 _____組 _____番	
氏名 _____	
●こんな状況、どう行動する？	
① A君がろうかを歩いていたら、人がぶつかってきたので、倒れてしまった。	_____
② Bさんは、友だちにメールを送ったのに、いつまでたっても返信がない。	_____
③ 友だちに貸したマンガが、いつになっても返ってこない。	_____
●「I（私）メッセージ」と「You（あなた）メッセージ」	
① A君がろうかを歩いていたら、人がぶつかってきたので、倒れてしまった。（Youメッセージ）	_____
Iメッセージ	_____
② Bさんは、友だちにメールを送ったのに、いつまでたっても返信がない。（Youメッセージ）	_____
Iメッセージ	_____
③ 友だちに貸したマンガが、いつになっても返ってこない。（Youメッセージ）	_____
Iメッセージ	_____
●今日の学習の感想	

▲ 学習ワークシート

(4) 学力向上にむけて

よりよい学級経営をしていく上で、個々の学力向上は大事な教育課題である。安心して学べる学習環境を作ることがすなわち落ち着いた学級を作ることでもある。

昨年度、少人数授業を3年生数学、2年生英語、3年生英語で毎時間実施した。補充的な学習を要する生徒5～8人で構成する小グループとその他に分けて、2教室で授業を実施した。

担当者で進度、定着度を常時確認し、学期末には、担当者部会で効果を検証し、必要ならばメンバー変更も行った。当初、習熟の程度等でクラスが分けられることに生徒が抵抗感を覚えるのではないかと心配したが、生徒

からは「質問しやすい」「発言する回数が増えてわかりやすい」などという肯定的な意見が聞かれた。担当者も、生徒の理解に合わせた授業の進度が工夫でき、学習内容の理解を深めることができた。



▲ 少人数授業（小グループ）

3 おわりに

一人一人に目を向けた、温かい学級経営を行うためには、学級担任だけでなく、学校という組織で生徒理解を深め、学力をつけ、見守っていく必要がある。また、学級指導だけでなく、教科指導、部活動指導などいろいろな場面で効果的な指導を行っていくことで温かい集団になっていくものである。

今後でもできる限り、生徒の情報を担任だけでなく所属学年の職員、他学年からの教科担当、養護教諭、生徒指導、生徒支援担当など多くの職員が共有し、生徒を見守っていくよう取り組んでいきたい。



特 高等学校 集 No.4

生徒一人一人の良さを
いかした学級経営
～工業高校で共通教科教員の
私が担任をするということ～



県立兵庫工業高等学校
教諭 おおえ はるか
大江 春香

1 はじめに

本校は、約900名の生徒が在籍し、建築科、機械工学科、電気工学科、総合理化学科、都市環境工学科、デザイン科、電子工学科、情報技術科の8学科を有する県下最大規模の工業高校である。

国語教員である私が、初任として本校に配属されて3年目となる。今回は、私が担任している都市環境工学科2年生の生徒と一緒に過ごす日々の中で取り組んだ、学級づくりの実践を中心に紹介する。

2 クラスでの取組

(1) 都市環境工学科2年生

平成27年度入学生までは、8学科を工業科I群、II群とに2分化した枠での募集であり、第1学年のクラス形態は科ごとではなく、群の中でシャッフルの状態であった。(平成28年度入学生徒から、科ごとの募集になったため、現在は第1学年から科ごとのクラス形態で3年間持ち上がりである)

平成28年4月、1年生のシャッフルされた4クラスから都市環境工学科として39名の生徒が2年生に進級してきた。都市環境工学科とは、主に土木分野について専門的に学ぶ学科である。39名中男子36名女子3名。一貫性のある指導を目指し、まず私という人となりを伝え、理解してもらおうと取り組んだ。

(2) ルールの徹底

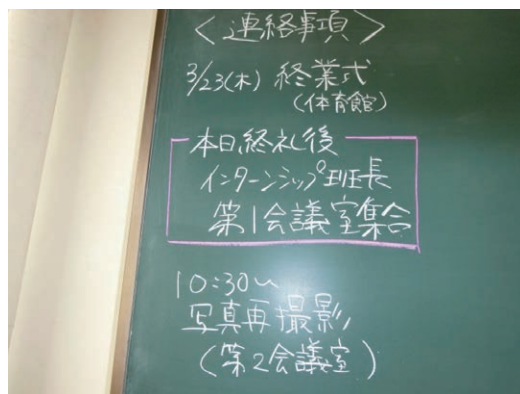
「○○という目標のためには○○しないといけない、だから○○だけは守る、それができていなければ指導するし、できるまでとこ

とんやる」ということをモットーにした。

具体的には、①メリハリをつける（オンオフの切り替えをしっかりと）②楽しむときは楽しむ、決める所は決める ③人の話はしっかり聞く ④生徒同士も生徒教師間もお互い気持ちよく過ごせるようにする という4つの目標を設定した。

目標を達成するために生徒に徹底させるよう心がけたことが2つある。

- ①失敗したときは必ず報告する
- ②黒板の連絡事項を必ず確認する（連絡事項を前黒板に担任が記入し、視覚的に情報を伝え、必ず見ることを周知徹底している）



▲ 黒板連絡事項（例）

(3) 目指してきたこと

特に大切にしていたのが提出物である。専門のレポートもそうであるが、クラスでの提出物は徹底するというところに取り組んだ。提出率100%は当たり前とするとともに、内容にも漏れがないようにいち早く提出する。どのような提出物でも必ず内容と期日を大切にす。進路に関係する書類で保護者の署名・印

鑑がいるというような類のものはもちろんだが、提出物は全て大事、これは出さなくていいというような考えは持たせないように指導を徹底した。

そのための取組として①提出日の設定を早くする②提出遅れの一度目は注意を促し意識を高める③二度目からは放課後残ってでも提出を目指す。このようなルールを徹底した。

エピソード

本校の検尿提出の設定日は二日間ある。しかし、私のクラスでは日頃の指導の通り、特別な事情がある場合を除いて、一日目を提出日とし、「全員一日目で提出しよう。たかが検尿と思わず一つ一つの提出物を大切にしよう」と伝えた。しかし、生徒が帰った後教室に容器が1つ落ちていた。これで一日目の全員提出は無理だと諦めていた次の日、容器を落として帰った生徒は別の容器を保健室でもらって帰り、提出日にきちんと間に合わせた。結果、全員1日で提出し提出率1位であった。別に間に合えばいいのではないかという意見もあるだろう。しかし、私は提出期日を守ることを目指しそれを徹底させた。生徒もその大切さを学び、行動することができたのである。

3 科との連携

専門学科についての知識に乏しい共通教科の教員が、いきなり専門学科の担任をすることには限界がある。そのため、毎日朝夕、専門学科の職員室に足を運ぶ。日々の授業等で生徒と関わる時間の長い専門学科の先生方との情報交換・情報共有は欠かせない。生徒についての話はもちろん、検定試験、専門授業、企業等についての話をする中で、自分も参加し共に取り組む。

(1) 科に入る

都市環境工学科2年生の授業時間割は全30時間中専門教科は16時間である（右図の網掛け部分）。ちなみに担任である私の担当時間は、現代文2時間+LHR1時間、計週3時間である。私より専門学科の先生方の持ち時間の方が多く、生徒と接する時間は長い。そ

のため、できるだけ専門学科の授業を見に行き、少しでも参加する。また、科での補習や放課後残って課題に取り組む必要がある際は必ず生徒の様子を見に行き、時には声をかけて励ました。

▼ 平成28年度都市環境工学科2年生時間割

	月	火	水	木	金
1	選択Ⅰ 測量	製図	LHR	測量	力学
2	選択Ⅱ 都市環境	製図	実習	数Ⅱ	測量
3	C英Ⅱ	日本史 /地理	実習	現文	数Ⅱ
4	体育	現文	実習	体育	日本史/ 地理
5	力学	施工	測量	選択Ⅰ 測量	保健
6	施工	C英Ⅱ	生物	選択Ⅱ 都市環境	生物

(2) 学校行事

学校行事はクラスとしてだけでなく、科として参加するという意識を持って取り組む。

平成28年度から本校では2年生全員がインターンシップに参加することになった。私自身はインターンシップに行った経験もなければ企業とのつながりもなく、科と連携することが必要不可欠であった。生徒の性格や人となりは担任である私が、専門教科における生徒の適性、企業ごとの仕事内容は科の先生方が熟知している。科のバックアップを得ながら、科と連携し、生徒にとってどの企業に行くことがベストか考えた。

また、企業への事前訪問やインターンシップの注意事項は科が先導して行い、言葉づかいや報告書・お礼状の作成は国語教師である私が先導して指導を行った。しかし任せきりにするのではなく、企業の業務内容や専門用語について私自身も調べて学び、生徒へフィードバックできるように努めた。

4 今の私にできること

この1年間は生徒とともにあがいた1年であった。39名中36名が男子という中で女性の私がどう彼らに接すれば良いのか、また3人しかいない女子とどう接すれば良いか悩んだ。

(1) 女子3人との接し方

39人の中で女子が3人しかいない。1人でないから決して心細くないだろうと考えるのは大間違いである。男女ともに個々に個性がある。女子3人はそれぞれクラスの男子と話もするし、仲の良い男子もいる。しかし、同性の話し相手も必要になってくる。私がそれぞれの相談相手として、時には個々をつなぐよう努めた。

(2) コミュニケーション

毎日全員と話す努力をした。(1)とは反対に、36名は男子である。事象によっては異性である私に理解しづらい部分・彼らが相談しづらい部分があると認識した。そこで、些細なことでも必ず毎日話しかけ、彼らが話しかけるきっかけを作るように努めた。

(3) 専門高校・専門学科にこだわらない指導

専門学科の指導は言わずもがな科主導で自然に行われる。そのため、担任である私は共通教科の教員にしかできない指導を目指して取り組んでいる。まずは学習面。専門高校であるがゆえ、どうしても専門教科を重視してしまいがちである。しかし、カリキュラム上時間数に制約があるからこそ、専門高校での共通教科を質的に重視すべきだと私は考える。共通教科の教員が担任することにより、専門教科の重要性・勉強の仕方は科の教員が、共通教科の重要性、勉強の仕方は担任である私が指導する。

また、専門学科に所属するということは少なからず視野を狭めてしまうことがある。専門学科で学んでいても、将来は違う道へ進みたいと考える生徒も現れる。そんな時、共通教科教員である私が専門教科以外の知識・視野を提供することができる。専門教科の教員と接し、学ぶ機会は1週間の授業の中で多く存在する。共通教科の教員である私が担任することにより、生徒に工業以外の面からア

プローチし、生徒の視野をさらに広げることができるのではないだろうか。

5 おわりに

私のクラスには誇れることが三つある。一つ目は欠席が少ないこと。二つ目は行事を全力で楽しむことができること。三つ目はクラスのルールを守り、やり遂げることができること。2年間を見通しての学級経営。工業高校で共通教科の教員である私が、担任としての役割を果たすためには科との連携が必要不可欠だ。共通教科の先輩女性教員でこの3月に都市環境工学科を2年間担任し卒業させた方から「科に通うことが大事。報告・連絡・相談を大切にしていれば、生徒とも科の先生方とも絆が生まれる」との言葉をいただいた。

1年間を終え、来年も担任してくださいと生徒から多数の言葉をもらうことができた。それが私の活動のエネルギーであり、もっと奮闘していくための原動力になっている。残り1年間、科との連携をさらに深め、共通教科らしさ、共通教科にしかできない取組という意識を忘れず、生徒と接しクラスを作り上げていきたいと考えている。



▲ 都市環境工学科2年生